アジア・太平洋戦争期における戦場での読書行為についての研究

早稲田大学教育学研究科　教科教育学専攻

中野　綾子

博士論文概要

本論文の概要は、以下の通りである。

まず、序章では本論文の目的と方法について述べている。本論文の目的は、アジア・太平洋戦争期における戦場での将兵（とくに学徒兵）の読書行為について明らかにするものである。戦地への書物の流通や兵士用出版物の刊行、戦時下の読書運動などについて分析することで、戦場でどのような読書行為が行われていたのかを実証的に明らかにし、そのうえで学徒兵という読者が、社会的・文化的に受容されていくまでの過程について分析をおこなっている。こうした考察から、戦中戦後における読書の歴史的な変容をとらえなおしている。

戦場では読書が厳しく禁じられていたというようなイメージがあるが、それは『きけわだつみのこえ』などの遺稿集に掲載される手記などにおいて、軍隊のなかで隠れながら読書を行う学徒兵の姿が影響を与えていると考えられる。確かに戦場ではこのように読書を行うことができない場合も数多くあったといえるが、決して全面的に禁止されていたわけではなく、戦場に流通した書物や読書体験も記録として遺されている。本論文の課題は、戦場を〈読書空間〉としてとらえることによって、ただ厳密に読書が禁止されていたわけではない、戦場での読書行為をとりまく輻輳した状況を描き出していくところにある。

将兵という読者を設定することは、戦地で何が読まれ、それがどのような文学的営為につながっていくのかという、戦争体験の描き方や記録の仕方の問題にも関わる問題である。そのため実証的に読書の状況を明らかにすることで、文学に描かれた兵士たちの読書や遺稿集によって作り出されてきた戦場での読書についての言説と、実際の読書行為との違いを検証し、その違いの意味を検討することが可能となる。こうした検討を積み重ねることによって、戦後に、なぜ戦場という〈読書空間〉のイメージが固定化されてきたのか、その歴史的な変容の力学についても同時に明らかにしていく。

本論文のねらいは、第一に読書・読者研究において、将兵という新たな読者を設定し、戦中戦後を分断するのではなく、連続したものとして分析する視点を提示すること、第二に、将兵という読者を足掛かりとすることによって、歴史的・空間的に変容していく読書行為のあり方を視座とした、文学研究の方法を模索するところにある。ただし、本研究段階では、資料的制約から学徒兵という読者を中心に考察を行っている。

そのための研究方法として本論文では次の三つのプロセスを中心に研究を進めた。書物

が戦場の読者にいたるまでのプロセス、書物を将兵という読者が読むプロセス、そしてそこで生まれた将兵がひとまとまりの読者のイメージとして受容されていくプロセスであり、これら三つのプロセスの分析を読者研究としてとらえている。

以降は、全九章からなる三部構成によって、先のプロセスの分析を通して、戦場が〈読書空間〉としていかに成立し、そこで行われた読書行為がどのようにして受容されていたのか明らかにすることを試みた。

第一部「戦場での読書行為」では、戦場での実際の読書行為に焦点をあて、戦場への書物流通や兵士に向けて作られた慰問用の書物の制作について、そして慰問用書物の兵士による受容について分析を行っている。こうした分析から、戦場が〈読書空間〉としてどのように成立し、どのような書物が読まれていたのかについて明らかにしている。

第一章「書物の流通・入手経路にみる戦場での読書行為」では、出版業者による戦場への書物の流通網がどのように拡大し、将兵がいかにして書物を入手していたのか、その方法について俯瞰的にとらえることを試みた。まずは、どのようにして戦地に書物が運ばれていき、流通範囲が拡大していったのか、東京堂や大阪屋号書店などの取次店、そして一九四〇年以降の日本出版配給株式会社による外地への書物流通の状況から明らかにした。ただし、戦場へと流通する書物は、こうした取次―小売店ルートを伴わない場合が多い。そこで、雑誌・新聞等の記事や将兵による日記から、一一通りの戦場での書物の入手方法を明らかにした。

第二章「戦時下の慰問出版文化―定着とその役割―」は、どのようにして書物が慰問品として戦地へと送られるようになったのか、またどのような慰問雑誌が制作されていたのか具体的な雑誌を挙げながら明らかにしている。まずは、軍人援護を担った恤兵部を介した各種軍事援護団体等による慰問活動から、民間で書物を戦地へ送るという慰問活動がどのように根付いていったのか考察を行った。とくに、木村毅の主導する「前線文庫」の活動を取り上げ、なぜこうした活動が行われたのか、第一次世界大戦や第二次世界大戦における諸外国の書物による慰問活動を考察することで、「前線文庫」を企画した木村毅の戦略について述べている。さらに、出版社による慰問雑誌の刊行に注目し、慰問活動と商業活動が接続することで可能となった慰問出版文化の特徴について明らかにした。

また、慰問雑誌文化が生じた背景について、慰問雑誌の例として陸軍によって制作された兵士用の雑誌である『兵隊』と『陣中倶楽部』の二つの雑誌を取り上げて論じている。陸軍恤兵部の要請により、大日本雄弁会講談社で編集された『陣中倶楽部』、火野葦平を初

代編集長とし、陸軍報道部員によって広東で編集・印刷された『兵隊』という二つの雑誌は、一九三九年五月一日に揃って刊行されたが、内容には大きな差が認められる。この二誌を比較検討することで、その読者層を明らかにし、軍における兵士の教育装置として戦地での読書行為が認められていたことなど、慰問雑誌の役割について検討した。

第三章「〈緩やかな動員〉のためのメディア―陸軍発行雑誌『兵隊』をめぐって―」は、第二章にて扱った雑誌『兵隊』における兵士による投稿を分析している。『兵隊』は、兵士によって編集が行われた兵士のための投稿雑誌であり、戦場での読書行為だけではなく、執筆行為をも推奨した雑誌である。これまでに『兵隊』は、兵士の声を記録した自由な投稿雑誌であることが評価されてきたが、戦地で編集された雑誌として、検閲や自主規制の問題を軽視することはできない。そこで、『兵隊』に掲載された投稿作品を分析することで、兵士が自由に読み、そして書く場所を提供しながらも、兵士の意識を緩やかに戦争に動員することとなった『兵隊』のメディアとしての特徴を明らかにした。厳しく取り締まるのではなく、初代編集長である火野葦平をモデルケースとし、「兵隊作家」として活躍する道を示すことによって、強制的ではないかたちで、緩やかに戦争へと動員されていく兵士を取り巻く環境について論じている。

第二部「戦時下、国内の出版文化と読書」では、戦時下の出版統制と読書の関係を考察していくことで、内地において戦場と読書がどのようにして結びついたのかを問い直す部分にあたる。第一部で明らかにしてきた戦場という〈読書空間〉を支える読書のありようを、内地における推薦図書制度や学生の読書から具体的に明らかにしている。

第四章「〈緩やかな統制〉としての推薦図書制度―文部省と日本出版文化協会―」では、文部省と日本出版文化協会によって行われた推薦図書制度を考察する。戦時下の言論統制は、執筆者や出版社に対する検閲が注目されてきたが、そうした統制だけではなく、出版流通や読書行為に対する制約もまた、一種の統制として機能していく。第四章では、推薦図書制度の基礎を作った文部省の推薦図書制度の成立過程を追い、戦時下に出版を一元的に管理した日本出版文化協会によって行われた推薦図書制度の仕組みの分析を試みる。それによって、戦時下の出版統制と読書統制が「良書」推薦という〈緩やかな統制〉としての側面を持っていたことを明らかにしている。

第五章「戦時下学生の読書行為―戦場と読書が結びつくとき―」では、前章での日本出版文化協会による〈緩やかな統制〉としての推薦図書制度が、戦時下の学生の読書に与えた影響について検証を行っている。そして、出版業界紙や大学新聞から、一九四三年以降

の学徒出陣期の、戦場での学生（学徒兵）の読書に関する記事を考察することで、出版統制のもと戦場と読書が接続していく様子を明らかにしていく。また、戦時下の学生と読書をめぐる言説からは、戦後に反戦的態度としてとらえられてきた戦場での読書行為が、戦場において戦意を高揚させるための行為としてとらえられていたことも判明する。

第六章「戦時下学生の読書法―木村久夫を例として―」では、戦時下の学生の読書のケーススタディとして、B級戦犯としてチャンギー刑務所にて処刑された木村久夫の蔵書を取り上げる。木村久夫の「遺書」はこれまで『きけわだつみのこえ』に掲載されたもののみとされてきたが、二〇一四年『東京新聞』によって、もう一つの「遺書」の存在が公表されたことで、これまでの「遺書」が、二つの「遺書」を組み合わせることによって作成されていたことが明らかになっている。その木村の二つの「遺書」によって、高知高等学校と京都帝国大学生時代に購入した木村久夫の四六四冊の蔵書が、高知大学へと寄贈されている。蔵書には、購入日や購入場所、読後感想が記されており、そこからは出版統制下の学生生活から入営直後の陸軍病院での木村の読書の様子を立体的に再現することが可能である。本章では、木村の蔵書リストと書き込み一覧を作成するとともに、第四・五章にて考察を行ってきた推薦図書制度や出版統制が、実際に学生にどのような影響を与えていたのかをとらえ、ある地方学生が上京し、そして戦地へ赴くまでの読書の変遷を考察している。

第三部「学徒兵という読者の変容」では、第一部や第二部で論じてきたことを受け、「学徒兵という読者」が社会的・文化的にどのように受容されてきたのかを考え、その影響関係を検討する。そのなかで、第一部や第二部において明らかにしてきた戦場の〈読書空間〉における学徒兵の読書行為のイメージが、戦後の読書ブームのなかで、反戦的態度として固定化してとらえられてきたことの理由を歴史的に明らかにする。

第七章「「遺稿集文化」を描く―太宰治「散華」論―」では、アッツ島での学徒兵の特攻とその死を描いた太宰治「散華」をとりあげる。これまでに「散華」は「青年」表象に着目した分析は行われているものの、その青年たちが読み／書く青年であることまでは注目されてはこなかった。第七章では、「散華」が掲載された学生向けの報国雑誌『新若人』誌面における読み／書く青年の表象を分析することで、「散華」が当時の読み／書く青年の文化変容を捉えた小説であることを明らかにする。さらに、「散華」において夭折する二人の青年には、遺稿を編むという点で対照的な点が見出せる。そこからは、夭折した青年の作品を遺稿集として刊行する「遺稿集文化」が、戦時下になり変容していく様子を看取する

ことができる。また、こうした「散華」の分析が、戦後の学徒兵遺稿集にまつわる改竄問題と深く関わっていることについて明らかにする。

第八章「堀辰雄ブームの検証―学徒兵の読書行為と愛読者批判の力学―」では、『きけわだつみのこえ』の刊行とパラレルに起こっていた戦後の堀辰雄ブームについて、学徒兵の読書行為との関係から考察を行っている。戦後の読書ブームのなかで、学徒兵が堀辰雄を読むという行為は、戦場での反戦的態度を示すものとして認められていくが、兵士の手記や日記に遺された堀辰雄への言及の分析からは、兵士としての矜持を示すために学徒兵に読まれていたことが分かってくる。第八章は、こうした学徒兵の読書行為に対するイメージが変化していく背景を考察したものである。戦後の堀辰雄ブームとともに、堀辰雄作品を読むという行為は反戦的態度として認識されていくが、その愛読者たちは第一次戦後派を中心とした堀辰雄周辺の作家たちによって、堀辰雄作品を理解していないと批判されていく。これらの批判言説を分析することによって、堀辰雄作品の愛読者を批判する行為が、戦時下に反戦的な読者であったことを示すことに繋がっていたことを明らかにした。

第九章「学徒兵の読書を描く―阿川弘之『雲の墓標』論―」では阿川弘之『雲の墓標』に描かれた学徒兵の読書行為について考察している。一九五六年に発表された『雲の墓標』は、『きけわだつみのこえ』などの学徒兵遺稿集によって、反戦の象徴としての学徒兵イメージが広く流通する事態に対する反発の試みとして執筆が行われ、懊悩しつつも日本主義的な傾向へと接近していく学徒兵の姿を描いた点が評価されてきた。こうした『雲の墓標』と同様の視点からまとめられた遺稿集に、『雲ながるる果てに』（一九五二年）があるが、第九章では『雲の墓標』に描かれた読書行為を、『きけわだつみのこえ』や『雲ながるる果てに』などの学徒兵遺稿集から読み取れる読書行為と比較を行っている。『雲の墓標』における学徒兵の読書行為は、これら学徒兵遺稿集によって作られた学徒兵の読書行為イメージを逸脱するものであり、戦後における読書ブームに対する批判として読むことが可能である。

終章「本研究の成果と課題」では、これまでの議論を振り返りながら、戦場の〈読書空間〉において学徒兵という読者を考察するうえでみつかった課題と、さらに将兵という読者を今後研究していくための課題について述べている。第一部では、戦場という〈読書空間〉が、戦場への書物の流通やそれに伴う新たな兵士用の慰問雑誌の制作、慰問書籍を戦地へと送る活動によって支えられ、形作られていったことを明らかにしてきた。戦場で読書が可能となる背景には、兵士の教育という目的があり、なかでもリテラシーの高い兵士

の意識を戦争に動員するためのメディアとしての役割がある。そして兵士を動員するメディアとしての役割は、強制的なものではなく、緩やかに統制を行っていくところに特徴があったと言える。第二部では、こうした戦場での〈読書空間〉を成立させるための、戦時下の内地における読書統制の様子を、推薦図書制度に注目するかたちで論じた。そして第三部では、第一部、第二部を通じて明らかにしてきた、戦場の〈読書空間〉において行われていた様々な読書行為が、戦後に反戦的態度としてみなされる歴史的な理由を、戦後の読書ブームとの関わりから明らかにした。

以上、各章の考察を通じて、本論文では、アジア・太平洋戦争下における戦場での読書行為について問うことで、戦中から戦後にかけての読書の変容についてとらえなおしている。